



國學院大學・学長

## 赤井 益久

# 建学の理念に結びついた グローバル化を推進し 本学ならではの人材を育成する

### 私の視点 — 課題をこう捉える —

#### グローバル化には “せめぎ合い”が必要

近年、日本の大学は積極的に大学改革を進めています。18歳人口の再減少期を目前に控え、競争力を高めることが目的の一つですが、その内容は、GPA、CAP制、PBL、アクティブラーニングなどに代表されるように、高等教育の先進国であるアメリカの追随に終始しています。追随ではなく、自学に合ったメソッドを構築できなければ、改革は長続きしないと思います。

大学にとって喫緊の課題はグローバ

ル化への対応です。参考にすべきは、日本史上最大のグローバル化ともいべき明治維新です。大日本帝国憲法が制定されたのは明治22年。日本は、欧米文化の導入と自国文化の擁護という、ある種の“せめぎ合い”を20年以上続け、欧米文化のよさと日本らしさを併せ持った近代国家へと変貌を遂げました。

大学も同じです。グローバル化とは、グローバルスタンダードを皆で等しく共有することを指すわけではありません。特に私立大学は、独自の建学の理念を持ち、固有の歴史的背景を背

負っています。大学がグローバル化を推進するときには、そうした理念や歴史と照らし合わせ、社会の要請と自学がめざす教育のせめぎ合いを直視しながら、個々に道を模索すべきです。よいものは取り入れるべきですが、無自覚・無批判に受け入れるべきではありません。私立大学のグローバル化には、この視点が極めて重要だと思います。

#### 社会が求めているのは 幅広い教養を持った人材

高等教育界は、社会の動向を読み

誤ったと言わざるを得ません。大学設置基準の大綱化以降、ほとんどの大学は教養教育を縮小し、専門教育にシフトしました。しかし、社会が求めているのは、幅広い教養を持った人材であり、大学が育てようとした人材像は、それと乖離していたのです。

大学は再び教養教育を重視する方向に向かいつつあります。教養教育、専門教育を学ぶことによって得られる、課題を解決に導く資質としての教養が求められています。教養の基本を支えるのは、時間軸と空間軸の意識です。歴史における現代の位置付けと、日本や自分自身の世界における位置付けを、さまざまな観点から認識できる力を、大学教育全体を通して涵養することが重要になっています。

#### リーダーがすべきことは 明確な目標や戦略の提示

学校教育法が改正され、学長の権限が強化されました。学長のリーダーシップは重要ですが、大学には独自の文化があります。それは、合議によって教職員の良識・見識に訴え、進むべき方向へ皆で歩むという文化で、トップダウンの指揮系統を旨とする企業文化とは決定的に異なります。悪い文化は削がねばなりません、よい文化であれば生かすことが必要です。

大学改革の実行には、教職員の理解と同意が欠かせません。そこで、理事長や学長などのリーダーに求められる最も重要な役割は、明確な目標と戦略を提示することです。そして、粘り強く

改革の必要性を訴えながら、全員のベクトルを合わせていくのです。それには時と場所を変え、何度でも同じことを訴え続ける忍耐力が必要です。本学が短中期計画として「21世紀研究教育計画」（第3次）を策定した時には、教職員はもとよりOBや保護者などに対して、私自身が繰り返し何度もプレゼンテーションを行いました。「またか」と言われるくらい繰り返して、ようやく方針は浸透していくものです。

改革の実行段階になれば、リーダーは細かなことに口出しする必要はありません。基本的には予算と人事面で改革の遂行をコントロールしつつ、大学のよい文化を残しながら、第三者の評価に耐え得る教育・研究組織の構築に務めるべきです。

### 國學院大學の改革

#### 國學院ブランドの 体現者を育てる

2011年に学長に就任して以来、私は「國學院ブランド」の確立と強化をビジョンとして打ち出してきました。大学のブランドとは「こんな人材を育成する大学だ」という社会の評価ですから、本学の卒業生こそが國學院ブランドの体現者ということになります。

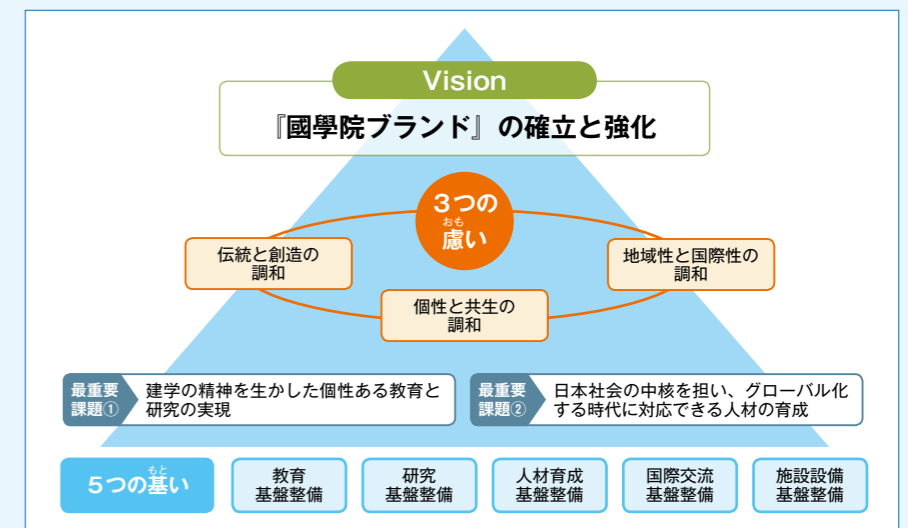
建学の精神は、本学の前身である皇典講究所、その初代総裁である有栖川宮熾仁親王の告諭を基底にしており、「日本文化の教育・研究」と「個性の発揮」が2本の柱です。本学ではどの専門を学ぶ場合にも日本文化というフィルターを通して考える、比較するといったことを大切にしており、その第一歩として、和室を中心とした日本

の伝統的な生活様式を学ぶ科目を選択必修にしています。そして、日々の学習や活動の内容を記録し、自己理解を深める「自分史作成支援」などを通し

て、生まれ持った個性を自覚させ、それを評価し、磨くことを教育の中心に据えています。

つまり、國學院ブランドとは、日本文

#### 21世紀研究教育計画（第3次）がめざすビジョン



化を理解して発信できることに加え、自分の個性を十二分に発揮できる学生が育つ大学ということになります。大学広報も、國學院ブランドを強化・浸透させる方向に転換しました。従来は入試広報が中心でしたが、最近では学長が前面に出て、社会に広く本学を理解していただく戦略を取っています。

ブランド強化には、IR人材の育成も重要です。アメリカの大学では、専門職員が担当していますが、日本のIRは主な目的が教育改革なので、教職員が協働しないとうまく機能しないと思います。そのようなしくみをつくって、調査結果の分析を政策提言につなげられ

るIR人材の育成に力を注いでいます。

## プッシュ型とプル型でグローバル人材を育成

本学のグローバル人材育成には、プッシュ型とプル型の2種類があります。プッシュ型とは、海外で活躍できる人材を育成するものです。本学の場合は、日本文化というフィルターを通して海外の文化に触れてもらい、個性発揮に役立ててもらいたいという意図があります。プル型とは、日本において外国人と交流し、日本文化を理解・発信できる人材を育成するもので、いずれも本学の建学の理念と結びついた取

り組みです。

プッシュ型においては、正規の留学プログラムとして、英語圏と中国語圏の双方に、半年間の Semester 留学と、1か月程度の短期留学があります。また、学生が起案した海外でのボランティアやインターンシップなどの活動を支援します。一方、プル型では、自学や近隣の博物館・美術館の収蔵品を英語で紹介したり、能や歌舞伎、落語といった日本文化を英語で学んだりするプログラムを数多く実施しており、留学生をはじめとする外国人に対する日本文化の発信力の強化に取り組んでいます。

## トップの横顔に迫る

### 研究者・教育者として

専門は、中国文学史における時代区分です。歴史学では時代区分が確立していますが、文学では唐と宋の間に大きな変革期があるとする説が有力でした。しかし、個別の詩人の研究からある傾向に気づき、文学史研究の世界に入って、実際の変革期はさらに1世紀ほどさかのぼることを論証しました。

中国文学史を教える際は、1回の授業で扱うテーマやジャンルを、できるだけ1枚のペーパーにまとめることを自分に課しました。私は何事に対しても目標を定め、戒めを課して取り組むことが多いタイプです。

### リーダーとして

恩師の一人、澤田瑞穂先生の「人生は直角に曲がれ」という言葉を、自

分への戒めとして大切にしています。これは、人生の節目を大切に、変わるべき時に変われということだと理解しています。助教時代には文学部改組の中心実務を担い、大綱化の波に翻弄されつつも、大学運営について勉強し、取り組み続けたことが今日につながっているのだと思います。学長就任時には「焦らない、諦めない、怒らない」という戒めを自らに課しました。これを守り、改革を推進しています。

### キャンパスで好きな場所

博物館と図書館です。考古学、神道学、校史学術資産など、本学の教育研究のエッセンスがここに集約されています。グローバル化が叫ばれる中、日本人の依って立つ基盤を理解する必要性を、「本物」に触れることによって深く理解できます。



とても厳しかった恩師・澤田瑞穂先生に師事した大学院生時代。



日本文化に関する膨大な史資料が収蔵されている博物館。無料で開放されている。

あかい・ますひさ ● 1950年神奈川県生まれ。1976年早稲田大学第二文学部東洋文化専修卒業。1978年國學院大学大学院文学研究科博士課程前期修了。1983年同博士課程後期満期退学。1985年國學院大学文学部専任講師。1988年助教授。1996年教授。2011年から現職。中国古典学会理事、日本中国学会理事を兼務。